

近況報告

田畑久夫

東京の女子大に勤務して9年が経過した。所属しているのは文学部日本文化史学科。大学の学部としては日本で最初に開設された学部。開設1年前からの準備段階から勤務することになったため、雑用が多く多岐であったことが頭の中にこびりついている。現在も多忙さは以前と変化がない。しかし、『昭和女子大学文化学研究』を刊行するなど、ようやく学科としての特色を出せるようになってきた。とはいえ、受験生の減少など他大学がかかえる問題の他、本学科においても、学部学生は勿論のこと、大学院生の就職問題など、前途厳しい面も多々存在する。

以上のような学内での近況については、別の機会に譲ることにして、今夏に実施したフィールドサーヴェイに関して報告しておきたい。

西南中国の少数民族調査は1985年から開始したので、15年ほどになってしまった。この期間長期休暇を中心に現地に出かけている。今回で40回近く出かけたことになる。正確な調査回数は覚えていないが、わが国の警察署に該当する公安局には詳細な記録が残っており、書類として保管されている。最近その記録を閲覧する機会があったが、本人がびっくりするほど詳しく書かれていた。一度公安局にマークされると、引続きこのような書類が作成されているようだ。

しかしながら、中国における少数民族調査も大いに变化した。すなわち、1985年当時では、北京・上海などの特定の大都市以外に出かけることが困難で、大都市に行くにも書類上の手続きなどが大変であった。少数民族居住地区は、対外「未開放地区」に指定されているため、当時やっと留学が認められた学生・研究者でさえ立ち入ることが不可能であった。1985年当時調査（といっても観光程度）の場合、所定の煩雑な手続きの上に、外国人が入って来て現地の人々に病気を感染されては困るという理由から、健康診断書の提出が義務づけられるというほどであった。

しかし、時代は変わり、西南中国においてもほとんどの県が対外開放され、基本的には観光あるいは調査が可能となった。といっても、これは原則で、一部の観光地やモデル農村以外、現在でも少数民族居住地区に関しては対外開放された県であっても、参観すらできない場合が多い。ましてや、希望する集落に滞在しての調査は、大変困難を伴うので、非常に稀である。現在でも、外国人が一般に人々の家に宿泊することが禁止されている。公安に見えれば、最悪の場合即座に国外追放処分を受ける。

このような制約が存在するのが社会主義国家の特色といえよう。そのためか、近年では中国のフィールドサーヴェイを行なう外国人の若手研究者が大幅に減少し、日本など外国に留学あるいは流出した中国人研究者が細々と自身の出身地区周辺のフィールドサーヴェイに従事しているという状態となっている。



今夏は、ここ数年に関心を持っているミャオ族についての調査を行なった。周知のように、ミャオ族はヤオ族と同様に西南中国を代表する少数民族で、分布範囲も中国領だけではなく、国境を越えてインドシナ半島北部の山岳地帯にまで進出している。とくにミャオ族に関しては、日本民族あるいは日本文化との関連が注目され、鳥居龍蔵以来数多くの調査・研究が続けられてきた。かように、ミャオ族は、わが国の研究者間ではなじみの深い少数民族といえよう。しかし、上述したような事情から、中華人民共和国成立後の調査は、漢籍史料による文献調査や、県城（県人民政府所在地）周辺の限定された地域での調査・研究が主体であった。このような現状を克服しようと実施しているのが、1985年以後のフィールドサーヴェイなのである。今夏は、西南中国の一角を占める貴州省西部に居住するミャオ族の分派「白ミャオ」族の調査を実施した。以下はそのときのフィールドノートを抜萃したものである。調査集落は、貴州省黔西南布依族自治州安龍県木壑鎮新加村批把組（戸数50戸）である。

8月18日（水）雲夜半大雨

昨夜宿泊した家にはベッドがあった。批把組には昨日やってくる。麓の木壑鎮耐力村耐力組よりカルスト地形独特の形状をした山腹斜面を登ること約3時間で到着。海拔高度は1450メートル。伝統的にはミャオ族はベッドに寝る習慣をもたない。しかし、批把組のミャオ族の家には1～数台のベッドがある様子。寝た場所は、一般には収穫した穀物の保管場所となっている2階。2階には梯子で登る。宿泊した家は家族が8名と多いため、2階にベッドを1台置いている。そのベッドを借用したわけだ。隣にはゴザを敷いて同行してくれた木壑鎮の役人、新加村の村長など数名が雑魚寝。1階には今回の同行者金丸教授（澤澤大学）など数名の女性が寝る。海拔高度の関係からか、耐力組と比べれば蚊・ハエがほとんどいない。しかし、夜の間ネズミを追い回す猫の音が煩さかった。起きてみると、ダニに刺された跡が手足に十数ヶ所あった。現地の人には刺されていないので、この種のダニに対しては免疫があるのだろう。フンは、昨日まで宿泊していた耐力組の「樺ミャオ」族の家から借用したもの。当家に宿泊が可能となったのは、フンを借用した家で調査したとき、来年「白ミャオ」族の調査をしたいという希望を述べたところ、現在宿泊している家の主人を呼びに行ってくれ、旧知となっていたからである。

夜明けは7時ごろ。家の人は、少し空が白みかけた6時半ごろから家内の掃除を開始する。ミャオ族をはじめ、少数民族は一般には大変清潔好き。朝食はとらないので1日2食。子供は、ちょうどこれから本格的な収穫がはじまるトウモロコシの焼いたのをほおぼっている。食べ方は、かじるのではなく実を1つ1つ芯からはずして食べている。粒が堅いためだろうか、食塩などの調味料をまったくつけないが、大変甘くて美味。トウモロコシはすべてモチ種。

トイレなし。家の人は岩の間の窪地や畑地ですますようだ。子供たちが集まってくる。女の子が多い。中国では一人っ子政策が徹底しているが、少数民族に関してはルーズな面もあり、当組では男の子が生まれるまで子供を生んでいる様子。同行の鎮の役人は当組担当とか。しかし黙認していると思われた。

昨日の午後聞いた組の概況に引続き、組の古老に集まってもらいhearingの開始。多くの古老（男性）は上手に中国語を話す。この点が「白ミャオ」族の特色か。他のミャオ族の分派集団は、このように中国語をうまく話せない。「盤ヤオ」族と同様、移動生活に従事していたときに中国語を覚えたのだろうか。ちなみに、最近ベトナムのドンバン高原で調査したミャオ族も「白ミャオ」族で、多少

中国語を話していた。hearingの内容は、移住史を中心とした歴史と生業関係に項目を絞った。

宿泊した家は、周囲をカルスト地形の特徴ある三角形をした山で囲まれた盆地の東南斜面。このような盆地を当地では「罫子」と呼んでいるが、盆地底の一部に水田が数筆存在する。水田は1981年に実施された生産責任制以降、当組に居住しているブイ族が開いたもの。以前はトウモロコシ畑であった。当組には水田はこれのみで、他は全て畑地。批把組は「白ミャオ」族の集落であるが、他の高地に住むミャオ族（「高坡ミャオ」族と称される）の集落同様、彼らが定着してムラツクリを開始する際に、農作業およびムラの運営などを指導する目的で、ブイ族など近くに居住する他民族を同時に住まわせたようだ。水田を開いたブイ族もそのような役割を担っていると思われる。

飲料水は盆地底の一角から出る湧水。雨季には斜面の岩石間から出る湧水も利用。盆地底など水の便が良好の場所では「パショウイ」と呼んでいるカンナに類似した植物が植えられている。根は「春雨」の原料、葉や茎は豚の飼料となる。調味料はトウガラシよりもショウガ。広西壮族自治区に近いためか、女性は麻をつむぎ麻糸をつくり、織り機で着用するスカートを作成していた。このスカートは、古老以外現在では着用しない。麻のスカートは、藍染めが困難なので白いまま着用していた。そのことからこの分派集団は「白ミャオ」族と称されることになった。現在では、ブラウスにズボンという漢民族化した服装が主流となっている。現金収入としては、牛・豚などの飼育および副業としての竹細工。

10時過ぎに朝食の準備ができる。今日は、我々が麓から飯米を60斤（1斤は500グラム）持参したので、家族も白飯。副食はニワトリとカボチャとウリ。大変な御馳走である。住民は食後2時間ほど休息する。ノートの整理がはじまる。

（昭和49年修了）